

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目： 情念・感情・顔：「コミュニケーション」のメタヒストリー

氏 名： 遠藤 知巳

本論文は、人間主体の内部で生じる諸作用をめぐる、西欧近代の多様な言説の系譜を辿ることで、近代性の論理を探究している。西欧においては、内部作用を一方で事物のように解剖しつつ、他方で内発的な独個性の座とするような、特異な観察的思考が行われてきた。この思考様式は、古代の哲学諸学派や神学を淵源とし、社交理論や文芸諸ジャンル、また雑多な社会観察の言説群と複雑に絡み合いながら展開した。主体内部の諸作用の多くは外界のモノやコトに触発されて発生するが、モノやコトの／という把持自体が、そうした作用の一つである。内部作用への注目は、必然的に、内部と外部との接続あるいは関係づけそれ自体を問題化する。内部／外部の接続において意味が発生するからには、かかる接続の様態（＝世界形式）の変遷には、近代における社会性の内部的差異が書き込まれている。

具体的には、一六・一七世紀の言説群の結節点となった情念と、一八世紀の感情の語彙、そして顔面そして／あるいは表情への一九世紀的関心の諸相が扱われる。「主体性＝主観性」や「内面性」を先取ることで、これらの語彙や概念を結局は同一視するという一九世紀以来の思考の慣性を方法的に停止し、それぞれを多層的な要素からなる意味づけの構造として解析する。複層的な意味空間が多重的にほどこけていき、別の意味空間へと移行していくさまを記述した。本論は序から始まり、一六の章に二つの補論を加えて構成されている。一～九章が情念の体制に、一〇～一四章が感情の体制に、一五、一六章が顔の時代の分析に当てられる。

主体内部の情念とその起因となる外的事物の運動が、「運動」として同一の身分をもつと同時に異なる存在論的位相にあること。この情念の問題系が議論の出発点である。情念を理性と対立する侵犯的原理だとしてすませるのは問題外だ。反省主体が未在ななかで反省が開始され、社会を安定的に語る外部観察視点の不成立のもとで、情念の抗秩序性が問題化される。裏返せば、「反省主体」や「社会」が安定して出現するには、いくつもの過程をくぐり抜けなくてはならなかった。その骨格をきわめて単純化して紹介する。

二章では、社交の論理のなかでの情念の位置を読み解いた。一六世紀には、礼節を介して、権力関係を疑似的な水平関係へと回路づける社交＝会話(civile conversation)が構成されるが、「友情」ある「助言」を受け取る／拒絶する側の不可視の意思の神秘化をももたらす。その極限に、礼節からの離脱としての暴力のルール化(決闘)が出現する。一七世紀以降、社交＝会話は大規模化すると同時に空洞化し、情念の偽装とそれを見抜く技法の必要性が言説化されていく。

同時期の修辞学にも変化が生じた。一六世紀修辞学は、古代修辞学における「弁論者」の理念を復活させると同時に、措辞の定義を細分化した。両者が重なる地点で、措辞に富んだ文章が情念と等値され、そうした文を駆使する、情念に満ちた語り手が現れる。一七世紀以降、情念はむしろ、文の背後にあって語句を断片化させる力となる。こうして、情念論は修辞学から自律していった(三章)。

初期近代の情念論は、アキナスによる中世的体系の解体の果てに登場した。アウグスティヌスやスコラ派が再浮上するなか、一六世紀情念論は情念＝受動をそのまま行為の能動原理へと読み替えようとした。その試みが挫折したことで一七世紀の地平が開ける。一般的情念／個別的情念という設定がなされ、情念のカテゴリー(名称)が問題化する。運動／変化とカテゴリーの同一性の意味論的調停が重大な問題となる(四章)。

そこでは、身体と魂の共在としての人間像が提出された。情念は、秩序壊乱的な過剰さへの傾向として人間に埋め込まれる。だが、靈感や熱狂の危機が超越性と身体性との直接的接触可能性を前提していたように、情念の抗秩序的性質はロマン主義以降とは異なる意味論を構成した。とくに、情念が除去不能である以上、その使用法があるはずだという発想が重要である。一七世紀の社会秩序は、情念をそのように見る視線の効果である(五章)。

一方、運動記述の自然学という観点から見たとき、情念論は対象→感覚→表象(観念)→情念の因果系列を追う機械論的記述様式を標準化した。主体の内外を俯瞰する視点が不在なため、因果の還元主義的特定に失敗する。むしろ、主体の内外を横断する運動として語り、主体や外界を実体化せずに内部／外部を構成するやり方だった。一七世紀的世界観のもっとも根底にあるのは、世界を二つの領域に分け、その対応関係を追尾しつづけようとする二世界の意味論なのだ(六章)。

この意味論は、二つの領域の横断と対応の単位としての記号の理論を要請する。七～九章は、そうした特異な自体的記号(character)の地平を探索した。まず七章では、古代以来の表示記号(sign)の理論を概観し、自体的記号が一七世紀に付加されたことを確認する。自体的記号とは、特徴でも人格でもある厚みが同時に記号であるような事態である。表示記号の束でもあるそれを別種の記号とすることが、一七世紀の思考を駆動させた。

自体的記号を最初に提唱したのは、普遍言語を構想したベーコンである。八章では、意味と記号が十全に一致することへの期待を繫留する場所としての自体的記号と、慣習によって意味が割り当てられる表示記号の恣意性との逆立的関係を分析する。ジョン・バルローの修辞学が示すように、それは、本質的で自己完結的な意味単位としての身振り言語の実体化とも結びついた。

九章では、社交＝会話の後継である社会観察形式としての「人さまさま」の展開に着目して、自体的記号が人格に近似する側面を取り上げた。最終的にそれは、他者の自己愛を観察する自己への「省察＝反省」という文体へと至る。それは自体的記号および情念の言説体制の終わりを暗示している。一八世紀以降、自体的記号は再び表示記号と特徴／人格へと分解されていくだろう。

続いて感情の体制に入る。一〇章はその分水嶺となった、ロックの感覚—観念論を詳細に分析している。観念と事物との直接的繋がりを切断することで、ロックは外的対象から情念へと至る因果系列を追尾できるとする一七世紀的思考様式を脱臼させた。それは、外部対象に帰着せず、既存の情念の名称にも拘束されない自己の感覚作用を「コミュニケーション」することを可能にした。とりわけ、快苦を反省的思考に自動的に随伴する状態と捉え、欲望が意志的に喚起できない自発性をもつことを強調したことは決定的だった。

ロック以降、sentimentを始めとする新しい感情の語彙が増殖していった。知的計算や顧慮以前に「抗しがたく」溢出する「自然な感情」が、他者への配慮＝慈愛心を指向すると語ることで、一八世紀道徳哲学は一七世紀の自己愛還元主義を否定する（反ホップズ）。しかし、慈愛心の自己享受を代表に、自己愛はあちこちで回帰する。自己愛と慈愛心は協働し続けるのであり、それが一八世紀的社交を組織する。自己愛が自明になった時点で、感情の言説空間は一つの終焉を迎えるのである（十一章）。

道徳（哲学）の領域と並んで、感情の言説が多く出現する領域が美（学）である。一八世紀には、芸術はまだ十分に美の特権的な場所ではない。むしろ、感情において美と道徳を強く連関させるしくみが働いていた。その点が一九世紀後半以降の美学・芸術学とは大きく異なる。一二～一四章でこの連関の論理と構造を論じた。一七世紀の古典主義美学から辿っていくと、美を独立した主題とし、道徳との連関を主題としたのはシャフツベリ以降であるのが分かる。一八世紀の美的経験は、各人に開かれた擬似的な所有であると同時に、所有の事実的不平等や利害関心的関与をその都度停止させる。それは、美学における無関心性と異なる様態だった（一二章、補論二）。

続く二章では美と道徳の連関の多角的位相を追う。表象を実物の模倣とする把握の延長線上で、表象に固有の実定性を見出す過程が進行した。その実定性は、表象が直接的作用と距離化された観察・鑑賞対象に二重化するというかたちで現れる。こうして芸術表象が自律しはじめるが、二重化の鍵を握っているのは感情の作動であり、とくに共感の道徳性の論理とほぼ同型になる。ハチソンはこの含意を大規模に拡張し、美的コミュニケーションと道徳的コミュニケーションとが多重的に連鎖するさまを表現している（一三章）。ハチソン以降、感情を踊り場とした美と道徳の重合は、（芸術）表象の背後で働いているとされる感情が一般化された美学原理に接近する側面（パーク）、自体的記号の残滓としての美的記号論（ハリス）、状态的持続としての美的感情（ケイムズ）など、さらに展開していった（一四章）。

最後の二章は感情の体制の後の言説空間の位相を論じる。ラファーターの『観相学断片』（1775）を契機とした、一九世紀全般に亘る観相学の流行と定着は、感情の表現／表情のさらなる外化として、顔面が出現したことを示している。一五章では、古代ギリシャか

ら始まる観相学の系譜がラファーターおよびそれ以降へと至る過程を追った。ラファーターは社交的相互観察を遊戯的に遮断して、表象を介した顔の読みとりを行う。この論理が転態することで、一九世紀観相学は、アトム化した個人同士で不可視の内面を読もうとする、広範な社会観察に接触していった。

一六章はデュシェンヌの『表情論』(1862)を分析する。デュシェンヌは電気刺激による顔面の形状を「表情」と捉えることで、顔に人格の精神性を読み解く観相学を空洞化させているが、写真を前にした鑑賞者の情動的反応に「精神性」を転写するこの浅く不気味な著作は、人格を記号に変換する運動が現在も続いていることを暗示しているのである。